KFC －帰国者交流会　通信７号

〒653-0038 神戸市長田区若松町 4-4-10 アスタクエスタ北棟 502 **2019．3．29**

Phone.078-612-2402／FAX 078-612-3052／E-Mail kfc@social-b.net

2018 年度の帰国者交流会

フフデルゲル

2010 年の聞き取り調査を終え、2011 年 6 月から始まったＫＦＣ帰国者新長田交流会（帰国者交流会）は、今年で８年目となりました。関連団体の皆様やボランティアさん、そして何より帰国者たちの大きな助力を得て日本語学習から太極拳、秧歌踊り、広場踊り、卓球、カードゲームなど様々な活動ができました。地域での活動として神戸まつりをはじめ、各種の地域祭りに参加し、「明舞地域交流会」でも初めて帰国者３人の声を反映した企画ができました。明舞交流会のプログラム確立もできました。また、訪問看護ステーションはれのご協力の元で継続的に健康相談や健康チェックができました。年度末にはもっと沢山の方に主体的に関わって頂けるために、第二回のボランティア選出を行いました。ここで、まずは皆様に感謝申し上げます。

反省としては一世の声をもっと聞かないといけない、もっとみんなが楽しめる秧歌踊りなどを増やしてほしかった、地域交流会でも戦争で被害を受けた当事者への配慮が足りないなど様々な課題がありました。

これらを踏まえ、2019 年度も帰国者の一人ひとりにとって安らぎの場、そして社会参加の場となるように頑張っていきたいと思います。また、6 月からは新長田会場は常設会場で行うことによって、秧歌踊りの道具を毎回運ばなくでもよくなりますので、気軽に秧歌踊りをすることができます。さらに帰国者の新しい担当者大石さんも会場の方に常にいますので、何かと動きやすくなります。では 2019 年度も皆様のご協力とご鞭撻よろしくお願いします。

2018 年度的归国者交流会

呼和德力根

结束了 2010 年的访问调查，从 2011 年 6 月开始的 KFC 归国者新长田交流会迄今为止有 8 年了。交流会得力于有关团体和志愿者们的支持，更是得力于归国者们的大力协助，从日语学习、到太极拳、秧歌、广场舞、乒乓球、扑克牌等等活动得以顺利进行。归国者们参加了以神户祭为首的各种地区活动。我们去年举行的“明舞地区交流会”，第一次反映了三位归国者的心声，并确立了明舞交流会的活动内容。另外，得到了访问看护中心はれ的协助，持续为归国者进行健康相谈和检查。年度末为了更多的归国者能主动参与交流会活动，举行了第二次的志愿者民主选举，选出了新的志愿者。在这里，真的非常感谢大家。

需要反省的地点也有很多，必须更加要倾听一世的心声，更要增加大家都可以高兴地参的扭秧歌的次数。还有，明舞地域交流会时没能好好照顾到因为战争而遭到迫害的归国者们等等，留下了各种各样的课题。

基于以上这些，希望 2019 年度的交流会能成为每位归国者放松身心，参加社会活动的场所，我想为之而努力。另外，6 月份开始新长田会场成为常设会场，秧歌的道具不用每次搬运了，随时可以扭了。还有归国者新的担当大石先生常驻会场，会更加方便了。2019 年度还请大家多多协助和鞭策。

KFC 帰国者新長田交流会 コーディネーター担当所感

季　穎

帰国者事業のコーディネーターを担当させて頂いてからもはや２年目になりました。週 1 回ですが、仕事内容もたいぶ慣れてきて、帰国者のみんなとも打ち解けるようになりました。

この一年は通常の交流会を初め、料理教室、神戸まつり、離宮公園の遠足など様々なイベントがあり、帰国者たちと共に過ごし、大変充実な一年となりました。

最も印象に残ったのは去年行われた明舞地域交流会でした。明舞団地に在住する多くの帰国者たちをより理解して頂くために、年 1 回地域の方々と交流するイベントが行われるようになりました。今回の交流会は前半が小笠原先生による帰国者医療問題の講演で、後半は３人の帰国者の生の声を聴く交流でした。後半はグループ分けして、帰国者の手作り「麻花」（中国の伝統お菓子）が振る舞われ、交流のお茶会が行われました。私が通訳で担当したグループは質問など活発でしたが、私が準備不足であまり場をうまく仕切らず、一世の方に配慮足りず、負担をかけてしまいました。

帰国者との関わりが多くなっていくうちに、帰国者のことより深く詳しく理解できるようになりました。特に一世の方々は残酷な戦争を体験し、心に一生癒せない傷を抱えながら生きてきました。帰国したものの日本社会に冷たくされ、言葉や生活習慣など大きな違いで孤立された特殊な存在となりました。私たちサポート側からはもっと帰国者に声を耳に傾けながら優しく寄り添い、気持ちを尊重しないといけないと思います。

４ 月に第二期の新しいボランティアが決まり、自主的に働き、お互いに協力し合い、明るくて風通しがいい交流会になるように願います。今年度も引き続きよろしくお願い致します。

KFC 归国者新长田交流会 协调员担当所感

季 颖

担当归国者事业的协调员不知不觉两年过去了，虽然交流会只有每周一次，工作的内容也熟悉了，觉得和归国者大家相处也越来越融洽了。

除了普通的交流会，还和大家一起举办了料理教室、参加神户节日、去离宫公园春游等等丰富多彩的活动，过得非常的充实。

最让我印象深刻的是去年举办的明舞地区交流会。为了让日本社会更近距离地了解我们归国者，又因为很多归国者住在明舞团地，每年决定在明舞举办一次和住在周围地区的日本人的交流活动。这次的交流会分两部分，前半部分是小笠原老师关于归国者医疗问题的演讲，后半部分是倾听 3 位归国者真实的声音的交流茶会。当天来了很多地区的日本人，非常热闹。茶会分了三个组，一边品尝归国者亲手制作的麻花，一边以归国者为中心交流。作为翻译我担当的组大家都很认真倾听，并提了很多关于回日本后的生活等等的问题，由于准备不充分，我没有把握好节奏，没有照顾好归国者他们。

和大家相处时间久了，更能深入了解归国者的处境。特别是高龄的一世们经历了残酷的战争，留下了永远愈合不了的伤口活到现在。好不容易回到了日本的祖国，又受到冷淡的不公平待遇，语言和生活习惯的大不相同让很多归国者处于在一种孤立的状态下，成为日本社会的一个特殊群体。作为支援帮助的我们更要善于倾听，尊重和照顾到每位归国者。

通过民主选举四月份第二期的归国者志愿者决定下来了，通过参与交流会的工作，大家分工合作互相协助，把长田交流会越办越好。今年我也会尽自己的努力服务大家，还请多多指导关照。

第 2 回帰国者地域交流会に参加して

小笠原理恵
（大阪大学大学院人間科学研究科・助教）

去る 1 月 27 日、中国帰国者がたくさん暮らしていらっしゃる明舞団地内のみなく～る明舞で、第 2 回目の帰国者地域交流会が開催されました。

私は「学習」の時間に、講師として参加させて頂きました。というのも、私が大学院在籍中、KFC の協力を得て、帰国者 1 世、2 世の方がたの「医療受診」についてインタビューをさせて頂いた経緯があったからです(詳しくは、小笠原理恵著『多文化共生の医療社会学　中国帰国者の語りから考える日本のマイノリティ・ヘルス』(大阪大学出版会)をご参照ください！)。

こぢんまりとした少人数の勉強会のような形を想定して、自由に意見交換ができるような場にしようと準備をしていました。学習の内容は、「中国帰国者の医療受診から、わたしたちの医療を考えよう」に決めました。日本の社会の中ではほとんど知られていない、帰国者の方がたの日常の医療受診の様子を、わかりやすく紹介して、その問題点を考えることから、これまでの日本の医療のあり方を振り返ろう、という試みです。

ところが、いざ始まってみて、参加者の多さにびっくり！　30 名は来ていらっしゃったように思います。多くの方に来ていただけた！という嬉しい悲鳴の反面、私の力が全然及ばず、自由な意見交換の場を作ることには完全に失敗…。結局、学習はパワーポイントを利用した講義形式で時間終了になってしまいました(先生の話を聞くだけの学校の授業が楽しくないのは、みんな知っての通りです)。この日の講義の出来を自己採点するならば、100 点満点で 30 点くらい、落第です…。もしも、また機会を頂けるのであれば、次回は落第しないように、楽しくかつ有意義な、密度の濃い「学習」の時間をつくれるように精進したいと思います。

「学習」に続いての「交流」の時間では、私も大いに楽しみました。あかねおもいやり 32 による手品に続き、帰国者楽団による二胡とフルスの演奏。みなさん本当に芸達者です。下茂さやかさんのピアノ演奏による合唱では、懐かしい童謡を一緒にたくさん歌いました。やはり生演奏はカラオケよりもずっと気持ちよく歌えます。それから忘れてはならないのが、帰国者有志お手製の「麻花（マーホア)」。日本では「よりより」とか「唐人巻」などと呼ばれている中国のお菓子です。この素朴な味がたまりません。そして、手がとまりません！

次回の交流会に参加できる機会を、今から楽しみにしています。

第二次参加归国者地区交流会

小笠原理惠
（大阪大学大学院人间科学研究科 助教）

今年 1 月 27 号在很多中国归国者生活的明舞团地内的“みなく～る明舞”里举办了第二次的归国者地区交流会。

我在「学习」时间，作为讲师参加了本次交流会。因为我在大学院的时候，得到 KFC 的协力，才得以让我采访了归国者一世和二世关于“接受医疗诊断”的缘由。（详情请参照小笠原理惠著作《多文化共生的医疗社会学从中国归国者的讲述来思考日本的少数人群的健康》 ）

在不大却井井有条的少人数学习会的形式下，准备了可以自由交换意见的空间和场所。学习内容我定为“从中国归国者接受医疗诊断来思考我们的医疗”。在日本社会中不为人知的归国者们日常接受医疗诊断的情况，以容易理解的方式去介绍。通过思考其

中出现的问题来回头看至今为止日本医疗的状态。

但是，开始演讲后，我惊讶于参加者人数之多！我想有 30 位吧，一边高兴有这么多的人能来参加的反面，而我的力量太薄弱，预想的自由交换意见的空间完全失败了……。最终，学习会以通过 PPT（图文演示的软件）讲课的方式演讲直到时间结束（大家都知道光听学校老师讲课就没什么意思）。这天的课程的完成度自己打分的话，100 满分大约 30 分吧，不及格了……。如果，再给我机会的话，我要为了下一次及格，创造出有趣又有意义而且高质量的“学习”时间而精进。

“学习”接下来是“交流”的时间，我也觉得很开心。“あかねおもいやり 32”的魔术后归国者乐队的二胡和葫芦丝的演奏也非常棒，大家都是真正的艺术达人。伴着下茂女士的钢琴演奏，大家合唱了很多的怀旧童谣，比起卡拉 OK 还是伴着现场演奏唱得舒畅。然后最最不能忘的是，归国者亲手做的麻花，在日本被称呼为“よりより”或“唐人卷”的中国小吃。我太喜欢麻花朴素的味道，导致我吃得停不下来。

我已经开始期待下次参加交流会了。

私の体験

田中　弘子
帰国者一世

終戦後、40 年近く中国に残された日本人孤児の私が 1984 年 11 月 16 日にようやく祖国に帰ることができ、自分が日本人として自分の父親や親族と再会し、とても嬉しく思いました。

私は昭和 11 年 11 月 21 日に神戸市にて出生しました。当時父はヨーグルトの製造所を自営したそうです。

私の家族は吉林省敦化神戸開拓団として満州に渡り、敗戦時には両親と弟 2 人、妹 1 人とで吉林省敦化で居住していました。敗戦を迎え、家族全員で敦化を離れて長春市に 11 月頃にたどり着きました。長春市では難民収容所に収容されました。収容所では伝染病が蔓延しており、収容されて数日で弟 1 人と妹が死亡しました。難民所では当時たくさんの日本人が死亡し、その遺体は裸にされて、馬車に山積みにされ、大きな穴に放り込まれて焼かれていた光景は今も覚えています。

長春市から貨物列車に乗って、12 月頃にようやく奉天までたどり着きましたが、奉天から先へは進むことができず、そこであばら屋に一時住んでいました。窓を開けることが出来ず、門を閉めることもできず、毎日寒い風が吹きさらして、ゆっくりと眠ることも休むこともできませんでした。また水道が凍結し、食べ物も飲み物もない毎日でした。

父は毎日仕事を探しに出かけましたが、仕事がなく、母は病気がちで物乞いをしながら生活をしていました。貧しい生活の中で、私が眠っている間に養父母宅に連れていかれたため、目を覚ました私は両親のことが心配で、泣いて食事を取らなくなり、心配した養父が一度私を両親宅に連れて行ってくれました。そこで母と再会したが、残っていた弟はすでに死亡しており、その遺体と対面しました。父は弟の遺体を埋める場所を探し回っていました。冬の奉天では寒さのため、地面が凍りつき、遺体を埋める場所もみつけられないのです。母は私を抱きかかえ、泣きながら「ヒロコ、ヒロコ、この方と一緒に暮らすように、あんた 1 人だけでも命を助けてもらってね、そうしないとあんたも死んでしまうよ。」と私を諭しました。そのため私は両親と別れて養父母宅に帰ったのです。これが母との最後（永遠）の別れとなりました。

その一ヶ月後に父が養父母宅に訪れました。父は日本に帰国するので、別れの挨拶に来たのです。私が「かあちゃんは」とたずねると父は低い声で「おかあちゃんなくなった」と言いました。当時私はとても信じられず、父の足を引っ張って、離そうとはしませんでした。当時父は自分一人でいきていくだけで精一杯で私を連れて日本に帰国することがとても無理でした。父から「一旦日本に帰国して、またお前を連れに戻ってくる」といわれまして、私は降り積

もった雪の上に座り込んだまま父を見送りました。

父と別れて、私は一人中国に残され孤児となり、養父母と中国で生活をしていくことになりました。

私は自分が日本人であることがわかっていたから、周囲の中国人達に負けたくないと、必死になって勉強しました。学校で成績が優秀だったため、推薦入学で 58 年に大連医科専門学校に入学しました。63 年学校を卒業して医師の資格を取得してから大連師範専門学校附属診療所の医師および、同校の医科の講師として勤務していました。私の専門分野は内科と鍼灸療法でした。

1972 年に日中の国交が回復しました。私は心の中で「日本には父がいる、父に会いたい、日本に帰りたい」と思っていました。他方、私をここまで苦労かけて、愛情をもって育ててくれた養父母と中国の人々に恩返しをしたいという気持ちもありました。当時、養父は心臓病を患い、養母は脳出血から半身麻痺になった状態でした。私が日本に帰れば看病することもできなくなるため、すぐに日本に帰れる状況ではありませんでした。

しかし、父が日本の墓に入れるため、弟と妹の爪や髪などを持ってたった一人日本に帰国した事を考えると涙がとまりません。

私は 1977 年（昭和 52 年）頃、友人を通じて、日本厚生省に自分の名前や父の名前を書いた手紙を提出しました。3 ヶ月経った頃に父の所在がようやく分かり、父から私宛に手紙が来て文通が始まりました。

1979 年（昭和 54 年）に私達は初めて日本に帰国しました。父に会い、そのまま日本に残りたいという気持ちもありましたが、何より養父母のことが気に掛かり、半年間の滞在期間を終えて、一旦中国に戻りました。

中国に戻ってから、日本にいる高齢の父を思わない日はありませんでした。父とずっと一緒にいたい、日本に帰りたい気持ちが強くなってきました。家族達は私の気持ちを充分理解してくれたお陰で、48 歳の私が家族と共に永住帰国しました。

帰国して一番苦労したのは、やはり日本語の習得でした。帰国して 4 ヶ月家族で埼玉県の所沢市にある中国帰国者定着促進センターで日本語学びましたが、4 ヶ月程度の研修ではとても日本語を満足に聞き取れず、話すまでにはなりませんでした。また、兵庫県中国帰国者自立研修センターで日本語の指導を受けました。日本語の指導と言っても、ただ日本語の文章を読み聞かせるだけで、日本語の理解は一向に深まりませんでした。日本語で難しいのは助詞の使い方などの文法です。しかし、中国語のできない先生に日本語のできない私達では質問もできません。同センターの日本語指導には 1 年以上通いましたが、日本語の習得に役立ったとはいえません。結局、自分で努力して学ぶしかありませんでした。

私は一日も早く社会に飛び込んで、現実の世界で言葉や習慣などを徐々に覚えていくほうがいいと思いました。

初めて日本に帰国した時から、父ら親族と同居しましたが、神埼郡福崎町から灘（研究センター）まで 4 時間がかかりますし、又就職先を探すのは大変でした。それで、垂水区の県営住宅に住むようになりました。

職業安定所に何度も通い、仕事を探しましたが、やはり言葉の壁や年齢などの問題がありました。また、私の履歴書を見ると、職安の職員の方から日本では中国の医師資格が認められないことを説明してくれました。「私は医者の仕事ではなくでも他の仕事でもいいのです。」とお願いしましたが、何ヶ月たっても返事は全くありませんでした。結局、友人の紹介で中国残留孤児に理解がある勤務先で働くことになりました。就職した頃は、職場の会話に苦労し、特に仕事上で使う言葉がなかなか理解できませんでした。常にノートに持って、一つ一つ書き留めて覚えていきました。

私は中国で 22 年間医師として働き、人の健康を回復させる技能と経験を身につけ、中国で実績も残してきました。日本に帰ってきてからも、ゆくゆくは自分の技能と経験を活かして、人々の健康回復のための仕事をしてみたいと願ってきました。ただいくら中国では医師であっても、日本の医師免許がなければ医師として仕事をすることはできません。

日本で鍼灸師の仕事をするには必ず 3 年間勉強し、国家試験に合格しなければなりません。そのための学費は数百万円もかかるので、当時の私はとても払える金額ではありませんでした。

昭和 61 年 6 月頃に厚生省中国帰国孤児相談室宛で、「鍼灸師の資格を取るのに専門学校で勉強したいが、授業料が高くて経済的な余裕がないので、対策を取ってほしい」訴えました。手紙には中国での学（費）歴や医療活動の履歴も添えました。しかし厚生省からはなんの返事もきませんでした。

神戸市垂水区にある兵庫県立盲人学校を訪ねて入学させてもらえないかと頼んだこともありました。しかし、学校からは「ここは盲人ばかりだし、学費も高い、3 年勉強したら、あなたは 50 歳を過ぎますよ。」と言われました。鍼灸やあんまの授業の手伝いの仕事をさせてもらえないかとも頼みましたが、それも断られました。

資格が得られないので、鍼灸、あんま、リハビリの補助の仕事でもしたいと思っていました。鍼灸やリハビリを行っている西明石から大阪、尼崎までの病院を片端から訪ね歩き、補助、手伝いとして雇ってもらえるように頼みましたが、どこからも「資格がないと」と断られました。その後ある病院で、電気治療、リハビリの仕事をすることができました。そのときは自分の技能を活かせているという実感がありましたが、4 年ほど勤務した後、父の体調が悪くなり（神戸の地震のごろ 3 月 7 日）、介護のために仕事を辞めざるを得ませんでした。

私達帰国者は長い間、日本に帰ることができなかったため、言葉や習慣など大きなハンディを負っています。政府がそのハンディを克服できるようにもう少し援助をしてくれれば、私たちは自らの力で働き、自立した生活を送れたはずです。

終戦後、私が中国残留孤児になってから、中国の人達は愛情を込めて日本人である私を大事に育ててくれました。教育や仕事なども中国人と隔てなく、同じように受けることができました。それなのに、ここ祖国の日本では国の対応はとても冷たく、私達は祖国に帰ってきてどうしてこのような苦労をしなければいけないのでしょうか。

そして私達残留孤児は裁判を始めました。国に対して残留孤児への謝罪を求める裁判です。私達は 4 年間苦労し、裁判を戦ってきた結果は神戸の裁判やっと勝訴になり、本当に嬉しく思いました。残留孤児を生み出したのは戦争前の政府の責任で、残留孤児は帰国後も苦しい生活をしているのは戦後の政府の責任ということをはっきり認める素晴らしい判決が出たのです。そして 2 年後の暮れ、中国帰国者の支援法が改正されました。

この法律では、国や政府が残留孤児に対する自分達の責任を認めましたが、その償いをするために定めたものではないです。この新しい法律によって、全ての残留孤児が支援を受けられる訳ではないですし、色々な制限がつけられています。例えば、出国 2 ヶ月以内、厚生年金 7%支援金内に含め、収入があればすぐ申告など、色々な制限を思い出すととても悔しいです。

私達残留孤児のような苦しみを味わわないために日本政府が二度と戦争を起こさないように。祖国日本の地で生活し、安心できるような老後生活を送りたいです。これが、私の人生最後の願いです。

我的体验

田中　弘子
归国者一世

战后，将近 40 年留在中国的日本残留孤儿的我在 1984 年 11 月 16 号终于回到了

日夜思念的祖国，作为日本人我能与自己的父亲和亲戚再次相聚，真的非常地高兴。

我出生于昭和 11 年 11 月 21 号的神户，据说当时父亲经营着一家制作酸奶的作坊。我们家随着“吉林省敦化神户开拓团”来到了满洲，日本战败时我和父母，两个弟弟还有一个妹妹一起居住在吉林省敦化。随着战败的到来，我们一家离开了敦化，11 月份左右到达长春。在长春，我们被收容在难民收容所。可是当时的收容所传染病肆虐，没几天我的一个弟弟和妹妹就死了。当时难民所死了很多日本人，他们的遗体被剥光，堆在了马车上，拉到一个大坑里用火烧，这个景象直到现在一直留在了我的脑海里。

后来我们从长春市搭上了一辆货物列车，12 月份左右终于到达奉天，可从奉天却前进不了了，只能暂时住在了一个被废弃的屋子里。窗户打不开，门又关不了，每天冰冷的风吹进来，根本没法好好休息。水道管也被冻结，每天连食物和水都没有。

父亲每天都会出去找工作，可是根本没有活干，母亲也总是生病，只能一边乞讨一边生活。在穷苦的日子里，父亲趁我睡着的时候把我抱到了养父母家，我醒来后很担心父母亲，哭得连饭也吃不下。养父很担心，便把我带回了原来的家。在家里我再次见到了母亲，但唯一生存下来的的弟弟也已经死亡，我只看到了他的遗体。父亲为了埋葬弟弟的遗体找了很多的地方，冬天的奉天因为寒冷，地面都结冰了，连埋尸体的地方都找不到。母亲抱着我，边哭边说“弘子，弘子，你还是和这位（养父）一起生活吧，这样起码你一个人还能活命，如果不这样的话，你也会死的”。被母亲劝解后，我离开了父母，回到了养父母家，那天是我和母亲的最后一次见面。

一个月后，父亲拜访了养父母家。父亲要回日本了，所以他是来说再见的。我问父亲“母亲呢？”父亲低声说“你母亲不在了”。当时我不敢相信，拉住父亲的脚，不让他离开。父亲一个人活得已经竭尽全力了，带着我无法回日本。父亲对我说“我先回去，然后来接你一起回日本”。我只能坐在积雪上眼巴巴地目送着父亲的离开。

和父亲分开后，我一个人留在了中国，成了孤儿，和养父母在中国生活了。我知道自己是日本人，不想输给周围地中国人，所以拼命地学习。由于在学校成绩优异，1958 年被保送进入大连医科大学学习。63 年毕业后取得了执照后在大连师范专门学校附属诊所当了医生，同时当上了同校的医科讲师。我的专业是内科和新针灸疗法。

1972 年中日恢复了正常邦交，当时我心里想“日本有我的父亲，我想见他，想回日本”。另一面，我又想报答对我倾注了爱又含辛茹苦地把我养大的养父母和那些中国人。当时，养父患有心脏病，养母脑出血半身不遂，在这样的情况下，如果我回日本就照顾不了他们了，所以当时不可能马上回到日本。可是，我一想到父亲为了能把去世的家人安葬在日本家族的坟墓，他一个人把弟弟妹妹的指甲还有头发带回到日本，我的眼泪就止也止不住。

1977 年（昭和 52 年）左右，通过友人，我把写着自己和父亲的名字的信寄给日本厚生省，大约 3 个月后知道了父亲的所在地，父亲也给我寄了信，就这样我们开始了通信。

1979 年我们一家第一次回到日本，见到了父亲，我很想就这么留在日本，可是我挂念养父母，所以结束了半年的逗留期间，我暂时回到了中国。回中国以后，我没有一天不思念在日本年事已高的父亲，想回日本的心情越来越强烈。幸亏家里人非常理解我，在我 48 岁的时候一家回国永住日本。

回国后最难的还是日语的习得，我们一家在琦玉县所泽市中国归国者促进定住中心学了 4 个月的日语，只有 4 个月的研修根本无法听懂也不会说。另外，在兵库县中国归国者自立研修中心接受了日语的指导，其实就是听老师朗读文章，根本无法深入去理解日语。日语最难的地方是助词的使用方法等文法，可是不会日语的我们无法向不会中文的老师提问。在这个中心接受日语指导一年多，但对日语的学习并没有什么帮助。最后，只能自己努力学习。当时的我很想能早一天进入社会，在现实世界中慢慢掌握语言和习惯等等。

刚回日本时，和父亲还有亲戚们住一起，从神琦郡町到滩（研究中心）要 4 个小

时，不好找工作，然后就搬到了垂水区地县营住宅。之后为了找工作我去了很多次职业安定所，由于语言的障碍和年龄的问题太难找了。职业安定所的职员看了我的履历后，向我说明在日本中国的医生执照是不被承认的。所以我拜托他们能否介绍医生以外工作，可是等了几个月也没有回音。最后，通过友人的介绍在理解中国残留孤儿的单位里就了职。刚开始工作时，我苦于听不懂会话，特别是工作上的用语理解不了。所以我就随身带着记事本，一个一个写下来记住。

我在中国当了 22 年医生，掌握了帮助人们恢复健康的技术和经验，在中国也有实际成果。回到日本后，我就希望有一天能发挥自己的技术和经验，做帮助恢复人们健康的工作。可是无论在中国多么有名的医生，在日本没有医师执照的话从事不了医生的工作。在日本想要从事针灸师的工作必须要学习 3 年，然后通过国家考试合格者才可以。然而学费就得需要数百万，当时的我无论如何也付不起的。

昭和 61 年 6 月左右我给厚生省中国归国孤儿相谈室寄去了一封信，“为了取得针灸师的资格我想去专门学校学习，但学费太贵，我的经济条件不宽裕，请求他们能否采取对策”。我把我在中国的学（费）历和医疗活动的履历也一起寄了出去，可是厚生省什么回音都没有。

我还去过神户市垂水区的兵库县盲人学校，拜托学校能否让我入学学习，可是学校说「这里都是盲人，学费又贵，学了 3 年后你都 50 了」。于是我便拜托学校让我做一些协助针灸和按摩课程的工作，也被回绝了。

取得不了资格，我就想做些辅助针灸，按摩，康健的工作。我把从西明石到大阪和尼崎有针灸和康健的医院从这头到那头一家一家访问，能否雇佣我做些辅助的工作，但都因为没有资格而被拒绝了。之后只有一家医院录取了我，终于可以做关于电力治疗和康复的工作，这时体会到了自己的技能得到了发挥。我大约做了 4 年，父亲身体越来越差，阪神大地震之后的 3 月 7 号，为了介护父亲，不得不把工作辞掉。

我们归国者由于长时间不能回到日本，背负着语言和习惯上很大的障碍。政府如果能帮助我们克服障碍并援助我们的话，通过我们自身的力量，完全可以自立地生活。

战后，我成为了中国残留孤儿，中国的人们不计前嫌的把作为日本人的我抚养长大，并给了很多爱和温暖。在接受教育和工作上也受到和中国人完全一样的待遇。相反作为祖国的日本国家的态度对我们非常的冷淡，我们千辛万苦回到了祖国为什么要过得这么辛苦。

所以我们开始了残留孤儿的裁判，是请求国家向残留孤儿谢罪的裁判。我们打了 4 年官司，最后神户裁判胜诉了，真的很高兴。政府承认了造成残留孤儿是战前政府的责任，孤儿回国后也过得非常辛苦是因为战后的政府的责任。真是大快人心的判决，2 年后中国归国者的支援法被改正了。

可是这个法律虽然国家和政府承认了残留孤儿是自己的责任，但不是为了如何补偿孤儿们而定的。根据这个新的法律，并不是所有的残留孤儿全部都可以接受支援，有很多限制。比如说，出国两个月以内，厚生年金 7%含支援金内，有收入的话马上申告等等。一想起这么多限制的内容我就很气愤。

为了不要再有像我们这样饱受痛苦的残留孤儿，我祈祷日本政府不要再次发动战争。希望在祖国日本的土地上有尊严的生活，安心的养老。这是我人生最后的愿望。

◆2019 年 2 月 5 日　新春会

編集発行：特定非営利活動法人
神戸定住外国人支援センター